【ポケダン】ピオとヒトカゲ【バレンタイン特別編】

aqwin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【ポケダン】ピオとヒトカゲ【バレンタイン特別編】

【Ｎコード】

Ｎ９５５８Ｑ

【作者名】

ａｑｗｉｎ

【あらすじ】

※カッとなって書きました　※現時点で未完成です　※全部で２～４話の予定です　※いつもよりも文章が粗いです　※完成しなかったら消します　※恥ずかしくなったら消します　※それでも良ければどうぞ。

前編　～夢から覚めて～（前書き）

……。

むにゃむにゃ……。

んはっ、くぅ……。

あうぅ、そんなに無理やり入れたら、ダメだってばぁ……！！

んんんんんん！！

「”かわらわり”」

「んはぁっ！」

僕の朝は、額への鋭い衝撃と共に訪れた。

前編　～夢から覚めて～

さわやかな朝……なんて形容できるはずもない。誰がこんな状態で快感を覚えようか。
おかげで徐々に覚めていくはずの眠気が、先程の衝撃の追加効果で妙に尾を引いている。

「あのねぇ……僕言ってるでしょお。毎朝毎朝”叩き”起こすの止めてって」

藁のベッドから体を起こして、頭痛に似たものを引き起こしている場所を片手で抑える。
主に眠気とそれから痛みによって、どうにもまぶたが開かない。するとうずくまる僕の頭上から声が飛んできた。

「じゃあ聞くけどね。ピオ、君はいったいどんな夢を見てたのさ？」

ぱちりぱちりと瞬きをして視界を回復させていく。顔を上げて正体を見定めると、目の前でややうんざり顔を見せているのは、僕の相棒（パートナー）のヒトカゲだった。
理由あってと言うか無くてというか、彼は自分の名前というものを持っておらず、種族名がそのままそれに当てはまってしまっている。そのため僕は彼をヒトカゲと呼ばざるを得ない。
そして同時に、彼はこの世界に恐らく二人といない、元”ニンゲン”の現ポケモンだ。そもそもの出会いは海岸で……と、これは長くなるので割愛する。
というかどうでもいい。今僕が猛烈に聞きたいのはこの頭の衝撃についてだ。それなのに質問で返すとは一体どういう事なのか。全く

もってニンゲンってやつは分からない。

と、思考に時間を費やし過ぎたようで、ヒトカゲがもう一度口を開いた。

「聞ーいーてーる？　昨日の夜から一体どんな夢を見てたの？」

「何って、食べきれないのに口に詰め込まれる夢だよお。それの何がいけないの？」

「別に夢を見るのはいけなかないけど、誤解を招くような寝言を毎夜毎夜叫ばないでほしいんだよ。気になって眠れないから」

誤解を招くって……ただ一通りにしか解釈できないと思うんだけれど。どんな風に間違えようがあるのだろうか。それはもしかするとポケモンの世界に無くてニンゲンの世界にある特有のモノなのだろうか。全くもってニンゲンってやつは分からない。

はっ、いけない。またヒトカゲのペースに巻き込まれて問題をはぐらかされるところだった。いつもいつもこうして論点をすり替えられていつの間にか煙に巻かれているが、今日こそはその手には乗らないぞ。

「今日こそはその手には乗らないぞ！」

「また心の中で呟いた事反復してるでしょ」

正面の相手にはエスパーの素養があると僕は時々思う。

「うるさい！　今日こそヒトカゲのペースには巻き込まれないからね！　僕が寝言を呟いていたのと、僕の額に感じる痛みとは、どこ

をどうやれば繋がるのさ！？」

「寝言を呟いていた→そのうち朝になった→僕が先に起きた→まだピオが寝ていた→起こしてあげた」

「ストップ！　”かわらわり”を使って僕の額に一撃を見舞うのは”起こしてあげる”とは言わない！」

「ひたいひたいうるさいなあ……”したい”にならなかっただけ良いと思いなよ」

「怖すぎるよ！」

全身に生えた黄色い体毛が一斉に逆立つ。冗談好きの彼の事だから問い詰めてもそうだと言い張るのだろうが、こちとら冗談とは思えないのである。

と、言い忘れてしまった。僕の種族はピカチュウだ。黄色を基調色とした体にギザギザ尻尾ととんがり耳。も一つ推せる特徴は、ほっぺの赤い電気袋だろうか。

そして話を戻す。こちとら冗談とは思えないのである。大事な事だから心の中だとはいえ何度でも言ってやる。

何せ、一言”かわらわり”と言っても、その威力は当然使用するポケモンの熟練度によりけりで、様々だ。それとは別に、拳の大きさも関わってくる。例えば同じ力を持ったカイリキーとヒトカゲがいるとして、各々”かわらわり”を繰り出せば、当然接触面積の小さな後者の方が威力が集中する。

頭の悪い僕でも、それくらいは分かる。毎朝食らっているからこそ。

「もう……アレはアレだよ。”あたまわり”だよ君のわざは」

「ごちゃごちゃうるさいなあ……いいから早く支度しなよ。今日も、”困ってるヒトを助けなきゃ！”、でしょ？」

引用文だけ甲高い声とつぶらな瞳で言わないでもらいたい。引用元の僕が恥ずかしくなる。

声の高さで大きく振り分けるとすれば、僕が♀1（ソプラノ）、ヒトカゲが♀2（アルト）と言ったところだろうか。

僕に至っては♀に本気で間違われる事がたまにある。♀のピカチュウの尻尾はハート型となっているのでそれを見れば一目瞭然だけど。それでも”声だけを聞くと♀だよね”とからかわれたりして、♀を守れるような立派な♂になりたいと強く願う僕としてはヘコむ材料の一つだ。

……そうだ、ハートと言えば。

「そうだよヒトカゲ！」

「うわあ！　いきなり叫んで一体何さ！？」

青いスカーフを首にまきまきしていたらしく、驚いた拍子にそれを落としてしまった。

恨めしげな目でこちらを睨んでくる。チョーこわい。でも負けてたまるか。

「今日は何月の何日か知ってる？」

「今日……？　ゴメン、覚えてないや。何かの記念日なの？」

覚えてない、と言うのが早すぎる。ろくに思いだそうともしなかったな、この面倒くさがり屋めぇ。

しかしそんな小さな事をいちいち気にする僕じゃぁない。何しろヒトカゲは元ニンゲン。ポケモンしか存在しないこの世界の記念日など、知る由もないはずだ。
今日こそは優位に立てる！　という心の叫びを口に出すとまたからかわれるから、ぐっと我慢だ。ここはこの世界でずっと先輩の僕が教えてあげようじゃないか。

「ヒント。僕の夢に出てきた食べ物の事です。僕は昨日からこの日を楽しみにしていて、それが夢に現れました」

「え、ベトベタフードの日？」

こちとらそんな物を好む特殊性癖は持ち合わせていない。

「ちっがーう！　バレンタインデーだよバレンタインデー！　ヒトカゲ知ってる？　知らないでしょ！
これはねー、２月１４日の今日、♀のポケモンが恋する♂のポケモンに、心を込めて作ったチョコレートをあげる日なんだよ！
これは”カオカの実”っていう珍しい木の実から出来ててね、すっごく甘いんだよ！　実をつける期間がわずかだから普段はあんまり出回らないんだけど、その分大量に入ってくるのさ！
あ、そうか。昨日は探検や救助に行かなかったもんね。食料の買いだしも僕の役目だったし、ヒトカゲはずっとここにいたんだっけ。だから知らないのも無理は無いけど、実は昨日カクレオンのお店からあま～い匂いが漂ってきてさ！　何かと思ったらそのチョコレートだったんだよ！
あの二人商売上手だもんねー。ちょっと極端かもしれないけど、店の商品が全部チョコレートに置き換わってたんだ。それを見て僕もバレンタインデーを思い出したってわけ！
そりゃあ、僕のことなんか好きになってくれてるポケモンなんかい

ないかもしれないけど……そんなのとは縁がなくても、友達の関係な♀のポケモンからも貰えるんだよ！
カクレオンのお店もそういうヒト達で埋め尽くされてたし……1コか2コくらい、僕達でもきっと貰えるよね！　楽しみだなぁ～甘い物大好きなんだよぼくぅ！」

ヒトカゲはどう？　と彼の表情を窺ってみると、そこには僕の予想の範疇を軽く超えた、驚愕のリアクションがあった。
普段は気だるそうにやや閉じている両目をカッと見開き、口はわなわなと震えている。尻尾から燃え盛る紅の炎は風もないのに激しく揺らめいていた。内なる感情がこうも素直に外へと現れるというのは、極めて稀なことだ。
思い出した。この顔は、初めて出会った時にヒトカゲが自分の変わり果てた姿を見て驚いた時に見せたものだ。という事は、今回の驚きはそれに匹敵するものだというのか。
正直、そこまで反応してくれるとは思わなかっただけに、自然と笑みがこぼれてしまう。いやあ、勝負に勝つって、こういうことなのか。ふっふーん、ふっふっふーん♪

「……レート……」

「え？　なに？」

「なんで……チョ…レー…ト……」

ヒトカゲは自分の額をがっしりと片手で掴みながら、下にうつむいてぶつぶつと1つの単語を反芻していた。
汗の滴さえ出てきて、ポタポタと固い土の地面の色を変えていく。

「あり得ない……なんでチョ……ト……しかも同じ日なんて……コ

レー……全く同じ風習で……レートが……」

「ちょっと！　どうしたのさいきなり？　いつものヒトカゲらしくないよ？」

「はっ！　……う、ううん。何でも無いよピオ何でも無い」

別に2回言わなくてもいいのに。それほど大事な言葉なのだろうか。大体、長くパートナーを務めている僕をごまかせるわけがない。この挙動不審ぶりはもしかして……

「いや、いやー驚いたよ。まさかニンゲンの世界と全く同じ風習が、このポケモンの世界にも全く同じ日にあるなんて」

「え、えええぇぇ！？　ってことは、ヒトカゲの元いた世界にもバレンタインデーがあったの！？」

「名前まで同じでね」

「うそおおぉ！？」

何たる偶然。何たる奇跡。こんな確率の低すぎる事象が起こってしまったら、もう当分僕にラッキーは訪れないじゃないか。くじ引きを引いてもハズレだというのに。

ん、待てよ。このラッキーはヒトカゲのものだから、僕には関係ないのかな？　いやいやこれは世界的な偶然なんだから、むしろその影響はこの星全体！？

えらいこっちゃ、それじゃあこの星はこれから当分アンラッキーになってしまう。世界クラスのトラブルが起きて、話を聞かない伝説のポケモンにお願いしにいくのはもうまっぴらだ！

「もしもし、ピオ？」

「はっ……な、何？」

「何って。また色々妄想を繰り広げてたでしょう？　長い間パートナーを務めてるんだから、それくらい分かるよ」

「う、ぅ……当たりです」

「もう、そうしてる間にも時間はどんどん過ぎていくんだよ。早くスカーフを首に巻いて、探検隊のバッヂをつけて。先に行っちゃうよ？」

「わあ、少しくらい待ってよ！」

”３つ数える間に”とも言わないで（３つだけでは無理だと思うけど）、無情にも背中を見せて歩いていくヒトカゲ。スカーフはどこだろう……あ、あった。しまったまさか寝てる時に背中でつぶしてたとは知らなかった。しわくちゃだ。ああぁ振り向けばもういない！　本当に容赦ない！　しわくちゃでいいから走りながら巻こう！　まったく。結局今日もヒトカゲの上に立つことが出来なかった。やっぱりこれがニンゲンの力ってやつなのかなあ？　全くもってニンゲンというやつは分からない。

……ところで、何かヒトカゲに言うのを忘れた気がする？　たしか彼の挙動について……。

前編　～夢から覚めて～（後書き）

【ピオ】
種族：ピカチュウ
性別：♂（声は♀）
特徴：首に巻いた赤のスカーフ
補足：
ヒトカゲのパートナーとして毎夜を一つの部屋で共に過ごしている。能天気でおっちょこちょい。だがどちらかというとツッコミタイプ。見えている落とし穴にも落ちる特性を持つ。最近は誰かに落ちた回数をカウントされているのだとか。
バトルスタイルは”早い者勝ち”。スピード勝ちして相手に特攻。外れるとイタイ。
お気に入りの道具は”しゅんそくのたね”。お気に入りのわざは”でんこうせっか”。

中編1　～まずはお店へ～（前書き）

「前から思ってたんだけど、ピオってさ……」
「ん？　なあに、ヒトカゲ？」
「……」
「……ん？　何で僕の額をただひたすら見つめてるの？」
「……いや、やっぱり僕の気のせいだったよ。ゴメンネ」
「ちょちょちょちょっと待って！　もしかして”かわらわり”のしすぎで額の毛がハゲてきてるとかそういう事！？　ねえそういう事なの、ねえ！！」

中編1　～まずはお店へ～

今日の天気は晴れだった。これからどう変化していくかはエスパーでないので未来予知など出来ないが、今現在は雲一つない快晴だ。

眩しい光は、優しくかつ確実な眠気覚ましだと常々思う。どこぞのドゴームの叫び声のように頭痛・耳鳴りも付加しないし、なにより額が痛くならないのが実に良い。基本的な天気、というのか日常的すぎてつまらないけれど、だからこそいつもと変わらぬ一日を保障してくれるのかもしれない。先程言った通り、僕に予知など出来はしないが。

僕は背伸びをして全身に活気を運びつつ、ヒトカゲと隣り合って街中を歩いていた。

街の名はトレジャータウン。誰がつけたのだろう、そこのところは良く分かっていない。名は体……というよりも、この場合においては名は地を表すと表現する方が正しいのだろうか。その意味する所は、この街のそこら中に宝物が埋まっている……わけではなく、それを求めて探検する”探検家”が多く訪れるという特徴だ。

道運びは実にシンプルなつくりとなっている。端の出口を直線で結ぶ一本道と、そこから枝分かれする左右の小道。それらの道の左右を埋めるように並んでいる様々な店を通り過ぎて進むと、大きな十字路に出くわす。前方は探検・救助へ向かうための出口（入口とも考えられるかもしれない）。

右方は海岸へと繋がっていて、初めて訪れるポケモンには数少ない観光スポットとなっている。沈む夕日にクラブたちの出す泡が照

らされ反射光を散りばめさせる、そんな貴重な場面に出会える事を願って。

そして残された左方はというと、ひたすら階段。地に足をついて移動する種族にはキツイものがあるだろう。ヒイコラ言わせて登りきると、プクリンというポケモンを象ったドーム状の大きな建物が見えてくる。

厳重なセキュリティ（足形確認するだけ）を突破して中を覗くと、ただの一本の棒が小さく突き出ているだけ。というのが初めてのお客さんの主な感想。その実下へと続くはしごとなっており、第一層、第二層……と足場が広がっている。建物のそびえ立つ崖の中をくりぬいた形になっているため、外見よりも遥かに広い。

こここそが、探検隊の育成・依頼受付、遂行を受け持つ、”ギルド”なのである。

組織に属さない”フリー”もいるにはいるが、ギルドに弟子入りして修行を積むのが大半だ。何を隠そう、僕達はその多数派であり、なおかつ卒業試験を完了して（やや）フリーとなった少数派なのだ。

……カッコ内で”やや”と表記しているのは、依頼成功報酬をガッポリ搾取されているからである。あ、言うだけでなんか悲しくなってきた。もういい。

とまあ、視線を遠隔操作して語るに語ったけれど。現実の僕はトレジャータウンの中を歩いている。

記念日で浮かれているせいか、歩調がちょっと早くなりそうだ。そのまま歩いていると、隣にいるヒトカゲを何事もなく追い越してしまう。

つまるところ、相対的にヒトカゲの方が歩行速度が遅い。絶対的に見れば、ヒトカゲはいつもと何ら変わらない歩行をしている。

横目でちらと表情を覗き見ても、いつも通り、目が半開きだ。睨みつけている、という風には見えなくて、上手い具合に穏やかオーラを醸し出している、ずるい。

もっとも以前本人に聞いてみたところ、「目を全部開けると視界に入ったヒトが石になっちゃうんだ」とのこと。冗談を正常に翻訳すると、「単に面倒くさい」らしい。信じるヒトは信じてしまいそうだからナチュラルに冗談を言うのはそろそろやめてほしい。

さっき――僕らの住む部屋で――はひどく動揺していたように感じたが、気のせいだったのだろうか。現に口に手を当てあくびなんかして、目尻には涙の滴が浮かんでいる。「ピオは能天気だ」と言われる事があるけれど、ヒトカゲだって同じ所があると思う。

いつも通りの天気に、いつも通りの表情。首に巻かれた青いスカーフもきっちりと巻かれていて、尻尾は歩調と同じリズムで揺れている。ひょっとして浮かれているのは僕だけなのかな、なんてちょっぴり落ち込んでしまう。わずかなため息が漏れてしまったが、それを横目で察したようだ。

「……何落ち込んでんの？　ピオ。僕が”あたまわり”した事はもう謝ったでしょ？」

「いや落ち込んでるわけじゃ……あぁついに”あたまわり”という名前を認めたよこのヒト。しかもゴメンナサイのゴの字も貰ってないからね、言っておくけど」

「ゴ」

「一文字だけ貰っても」

口にする冗談も、どうやらいつも通り。「いつも通り」と何回言っただろう。「ぼきゃぶらりぃが少ない」とヒトカゲに指摘された事もある。普段感情の変化を現さない彼だ。特別な日という今日、もう少し振る舞いに変化が訪れるのかと期待したんだけど、ダメみたい。

失意の溜息と共に僕は痛みの残る額に手を当てる。まだジンジンしている。ヒトカゲの一点集中奥義は高威力の上に長引くからタチが悪い。

「いらっしゃいませーヒトカゲさん！」

「いらっしゃいませーピオさん！」

スカーフを思い切り引っ張ったような耳に残る特徴的な声は、真横から。近距離での大声だったために、アイデンティティの長い耳がびくんと立ってしまう。一人が一人ずつこちらの名前を呼び、その声色は互いが互いの真似をしても誰も気づかないくらい似ている。この街で道具屋を経営しているカクレオンの二人だ。

体を向かい合わせて二人の表情を窺うと、それこそ”満面”の笑みがそこにはあった。ヒトカゲが初めてここへ訪れた時、これらの表情に得体の知れないモノを感じたという。

「びっくりしたぁ……大声出さないでよカクレオンさん。気絶しち

ゃうかと思ったよ」

「いや～すみませんね～。でもいくらポカポカとした陽気だからってボーっとして歩いていると、大きなポケモンさんに踏み潰されちゃいますよ～」

「うわーせめて”ぶつかる”くらいの例えにしてくれないのソコ」

僕が苦笑いを浮かべると、緑色のカクレオンは口を大きく開けて笑い声を上げた。何がおかしいんだ笑う所ぢゃないよ。ピカチュウプリントだよ想像してみてよ。

そういった思いを口には出さないで、ごまかすように目を動かしていると……おや。やたらと茶色い物ばかりがレンズに映る。そこはたしか日替わりの商品を並べる場所のはずだ。まあ頭の悪い僕でも昨日の出来事を忘れるほどマズイ記憶ＬＶではないので、完全に正体を理解する前から予想は出来ていた。

「これ、昨日に売っていたチョコレートでしょ。しかもカウンター一面茶色一色……売り切れたんじゃなかったの？」

「いやー今日は年に一度の大イベントですからねぇ。ついつい調子に乗って仕入れすぎたようで……実を言うとまだまだ余ってるんですよ」

ハハハ……と若干乾いた声で頭の後ろをポリポリと掻き始めた。とすると何か。その後ろに積み重なっている袋の中身は全てチョコレートだというのか。今朝に見た夢を思い出してしまったが、あれ全部を口に詰め込まれたとしたらそれはもうどれだけ”ゆめくい”されれば消える悪夢なのだろう。

「いくらなんでも……買い過ぎだよカクレオンさん」

「なあに、心配ご無用です！　ご購入をお忘れになって、今日慌てて買いに来るようなヒトもいらっしゃいますし。何と言っても一番多いのは一個も貰う事が出来ずにヤケになって買い叩く♂連中ですね。どれにしたって赤字には成り得ませんっ」

そんな「＞＜」な目で舌を出して言うような台詞じゃない。手を「b」（グッジョブサイン）にして言うような台詞じゃない。本当に根っこから商売ポケというのか……時折セールストークに負けてふらふらと一ポケ（お金）を差し出してしまうのはいつも僕だ。ヒトカゲじゃあない。

おや、そういえばさっきっから大事なパートナーの♀2（アルト）ボイスが聞こえてこない。普段からあまり物を言うタチではないから不自然ではないけれど。代わりに紫色のカクレオンの声を耳がキャッチした。

「ピオさんピオさん。ヒトカゲさん向こうに行っちゃってますけどいいんですか？」

「え」

弾かれた様に首を横に向けると、距離感による小さい姿で平和的にヒトカゲが歩いていた。

「えええぇぇ」

薄情にも程がありすぎる。足をバネブーのように軽く弾ませ、着

地後は大きく体を縮める。反動で宙に大きく体を伸ばした僕は、残像光を纏って”でんこうせっか”を繰り出した。

無風の空気の中で動く僕だけに風が訪れ、体毛を後ろへ立たせていく。二回のジャンプ程であっという間にヒトカゲに追いついて、首の青いスカーフを引っ掴んでブレーキ。そのまま大ジャンプして舞い戻る。往復で二つの残像光が成立する程のスピードは出せたようだ。満足。

「おかえりなさいピオさん」

「はあ……ただいま。もーヒトカゲ、なんで先に行っちゃうのさ。さっきの距離からして一歩も止まらないで進んでたでしょ？　早く答えて！」

「げっほ……すがーふ」

しわがれた声で一瞬何を言っているのかと疑問に感じたが、その意味はすぐに変換出来た。慌ててその指摘物を、右手のグーをパーに変えて解放する。咳を数回鳴らして立ち上がったヒトカゲは、体についた土をパンパンとはたいて、最後に一回咳払いをした。

一方で僕はその間ずっと両手で額をガードしていた。もう一発食らっては多分小一時間意識が飛ぶ。ヒトカゲはしばらく、いつも以上に細めた眼差しをこちらに寄越していた。これは間違いなく”にらみつける”な眼差しである。黄金の右手が振り上げられる……かもしれなかった直前に、僕にとっての救いが横から割り込んできた。

「ヒトカゲさん、いらっしゃいませ」

「い。あ、あぁ、どうもです」

「どうもです、じゃないですよ。どうして何事も無かったかのように通り過ぎちゃうんですか、わたしゃしょんぼりですよ」

「え、どうして、って」

「そうですそうです。ヒトカゲさんはピオさんみたくボーっとする事も無いでしょう。聞き逃したって言い訳しても絶対に信じませんよ」

「う、う〜……」

緑と紫のカクレオン二人がずずいとカウンターから身を乗り出してヒトカゲに迫る。しれっと言い訳するのかと思いきや、彼にしては妙に口ごもっているようだった。

おかしい。ヒトカゲがこんな風にたじたじにされるなんて、滅多に無い。この際さりげない侮辱発言はどうでもいい。絶対におかしい。

長い間パートナーを務めてきた僕の眼は伊達じゃないのだ。そりゃあもう目を開くのを面倒臭がるヒトカゲなんかよりもずっと冴えているに決まっている。

ここで助けるのもパートナーとしてはまずまずだが、それよりもヒトカゲの異常の原因を見抜く事が大切じゃないか。よし、僕も参加すべきだ。別に額がジンジン痛いとかそういうの抜きで。

四つの目に二つ新たな光が加わって、彼はますます居所が悪そう

にしていた。目は注がれる光線を受け流すように空を向き、冷や汗らしき滴が顔面を伝っている。

周りを通行ポケが歩いていく中、ここだけが変てこな空気に包まれている。ほぼ全てのヒトがちらとこちらを見るので、無意識にその人たちも視線攻撃参加者だ。もはやどちらも引き下がれない状態に陥ってしまっていたが、それに終止符を打ったのは、意外にもカクレオンの方だった。

「ま、いいですよ。どうせこのまま問い詰めても絶対に口を開かないでしょうからね。そういうおヒトです、あなたは」

「確かに。それにその理由を私達が知っても知らなくても、これから先の商売には関わりが無いでしょうからね」

要は、これ以上の進展は望めない、という訳だ。優秀な商売ポケは引き際も心得ているという事だろうか。ヒトカゲは胸に手を当ててホッとしていた。

が、引いた後には押すわけで。

「それより！　ヒトカゲさんも見て下さいよ～この品々！　ご存知かもしれませんが、今日はバレンタインデーなんですよ！先程ピオさんにお話ししたのですが、実は仕入れすぎちゃって。ここだけじゃなくて後ろの袋にもチョコレートがぱんぱんです」

ああ、やっぱりぱんぱんなんだ。僕の予測は間違っていなかった。カウンターに両手をついて置かれたチョコレートに目を通す。板状、丸型、そして定番のハート型と、昨日見かけたものばかりである。

ゆっくりと舐めるように左から右へと見渡し……ていると、パー

トナーの横顔があった。

「そっそそ、そそそそうなんですかぁ」

発する声が震えまくっている。ふと見ると眼(まなこ)はいつもの細目ではなく見開かれていて、カウンターと奥の袋との往復運動をひたすら繰り返している。

「それはそれは、なんとも……あぁぁそうだ。僕みたいな”ほのおタイプ”が近くにいると、きっと……も融けちゃいますよ。商売の邪魔をしちゃ悪いし、僕はもう行きますね〜〜」

抑揚のない……もうこれは棒読みだ。別れを告げる手振りも何やらギシギシいっているし。この挙動はもしかして……ぐふ！

「ほぉらピオ。いつまでもここに居座っていちゃあカクレオンさんに悪いでしょぉ。さっさと行くよ！」

情けない声が漏れてしまったと気付いた時には、既に遅かった。僕は今親友にスカーフを掴まれて地面を引きずられています。

横向きに見える通行ポケから注がれる眼差しがとてつもなく痛い……がそれ以上に首が痛い……このままでは遺体……。自由に動かせる両腕をわたわたと宙に泳がせるが、意味を成さない。一分の隙をくぐって、どうにか声を出せた。

「げっほ……すがーふ」

中編1　～まずはお店へ～（後書き）

【カクレオン×2】

種族：カクレオン
性別：♂なんじゃないかな
特徴：甲高い商売声。ステータスＭＡＸの裏の顔。
補足：
ゲーム通りトレジャータウンで店を経営している。
体色は兄が緑で、弟が紫。といっても皆が兄弟だと言っているだけで、実のところの関係はよく分かっていない。
多くの探検家を目にしてきたため、その目は商売関係以外にも鋭い。
ヒトカゲに対する呼び名は、”ヒトカゲさん”。一番無難である。
ピオに対する呼び名は、”ピオさん”。まさしく無難である。
「踏みつぶされてしまいますよ」という冗談を言ったのは、実際にピカチュウがバンギラスに踏みつぶされるのを目撃したからである。
そのピカチュウがピオだったかどうかは果てさて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9558q/

【ポケダン】ピオとヒトカゲ【バレンタイン特別編】

2011年10月9日23時39分発行